

バリエーションルート 奥穂高岳南陵について

奥穂高岳南陵は、穂高岳のバリエーションルートの一つである。バリエーションルート・ガイドを集大成したものに、[日本山岳大系「槍ヶ岳・穂高岳」](#)（白水社、1997年6月10日発行）という書籍がある。岳沢の項で紹介している7ルートの中の一つが南陵ルートだ。初登は1912年8月で、ウォルター・ウェストンと道案内の上条嘉門次により登られていて、その時のレポートは、[「日本アルプス再訪」](#)（平凡社、1996年9月11日）に詳しい。また最近では、岳人2013年1月号の「日本百名山第1回穂高岳」で、百名山の深みへ「岳人巖登頂選ルート」として、「南陵ルート」が服部文祥氏により紹介されている。当時、ウェストンは50歳、嘉門次は64歳で、今のような登山道がなかった時代に上高地から日帰りをしているのは驚かされる。また、ウェストンは次の年（1913年）に夫人同伴で堂ルートを登っている。我々は、事前にルート情報を入手でき、近代的な登攀装備だったが、岳沢の野営場を4時10分に出発し、帰りは重太郎新道を下り17時30分に野営場に戻った。

話はそれだが、本稿では、この南陵ルートの紹介と、文献ガイドとウェストンのレポートを引用しながら私見を入れてみることにした。引用部分は青字は「日本山岳大系」、赤字は「ウェストンの記」である。



上高地の河童橋から見る岳沢と奥穂



南陵とトリコニー

「吊尾根の奥穂よりから岳沢に伸びる尾根で、中間部にある三つの岩峰トリコニーで有名な古典的ルートである。」

「われわれが大好きだった山をふたたび私を歓迎しようと、一週間前から待ち続けたと彼は言う。そして、かれわれとの再会を心から喜んでいるのを見るのは、じつに嬉しい。われわれはこの再開を祝うために、上高地から奥穂山塊の最高峰を新ルートから初登攀する計画を立てた。このルートはかつて

嘉門次が十七年ほど前にクマを追跡したときに一部をたどったことはあるが、その全ルートをとったことはない。」

写真の中央左が「三つの岩峰トリコニー」だ。この尾根を特徴付ける岩峰で、実際登ってみて面白かったところだ。「古典的ルート」といえるのは、ウェストンと嘉門次が1912年の登り、手記を残しているからだと思う。写真の中央の小ルンゼが取り付きで、左の谷が扇沢、右の谷が滝沢で降雨直後は大滝がかかっている。



扇沢雪溪



滝沢大滝

「岩も堅く、楽しいルートで人気がある」

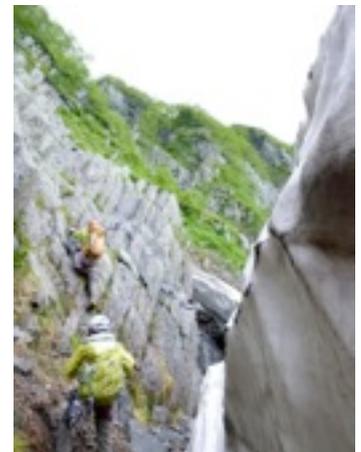
確かに人気ルートで、ネットで検索すると何件かのレポートがヒットする。最も詳しくしたのは、私のサイトのリンクにある、「山の手帳」さんのレポートだ。2回登攀しており、ウェストンの足跡を訪ねる意識した登攀が興味深い。といっても、南陵は一般登山道ではない。安全に登るためには登攀の技術が必要なのはもちろんだが、岩峰を一日歩けるだけの体力も必要だ。

「雪溪の状態によっては取り付くのに苦労する。」

「沢のモレーン上の河床の上部は、小山のように高まった、吹きさらしの長い雪溪に覆われている。これは、我々にとって喜ばしい救いであったが、それも最後は深さ9メートルほどのベルクシュルントに突き当たる。そこで、注意しながらピッケルとロープを使ってその中に降りていき、とうとう、先の岩場の安全地点に無事に達した。」

シュルンドが口を開いているので、簡単には岸壁に移れない。我々の登攀は7月中旬だったが、すでにシュルンドが口を開いていた。運良く一カ所だけ雪溪の末端が岩壁に接して移ることができ、雪溪の下に潜り込んで岩壁に取り付けたが、雪溪の崩壊などが考えられるのでリスクはある。

「ルンゼが終わると草付きの斜面となり、すぐにスラブに突き当たる。南陵で最も悪いところだが、ルートはいくつか選べる。」



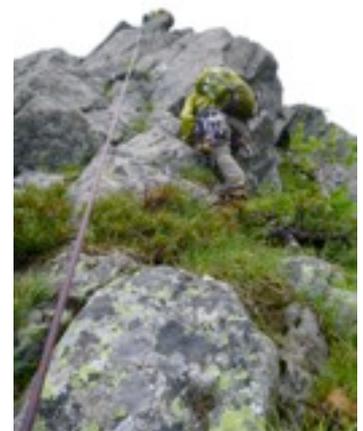
雪溪の下から取り付く

「今や、我々がたどるルートは、とてつもなく急峻な岩のバットレスであり、それからの二時間は、非常に厳しい登攀であった。穂高のこのフェースは、日本アルプス全体の中で最も長い、連続の登攀を強いられる。困難さの点で、ヨーロッパ・アルプスの数多くのすばらしい登攀と同格である。嘉門次は目覚ましい軽快な動きで前進した。清蔵と同じように、その足指と硬いしわのよった手指を使って、登っていった。濡れてぬるぬるした岩壁は、彼の柔らかいわらじを履いて、その安定した足場を確保する必要があった。」



スラブ帯

その通りである。草付きの斜面には、ミヤマクロユリ、シナノキンバイ、ハクサンイチゲが咲き乱れていた。傾斜がきつく、滑ると危険なので、アンザイレンで登り、スラブの手前で小休止した。ずるずるの斜面はいやなものだったが、問題はここから先。スラブは濡れているのでこの日は問題外だった。いろいろとルートがあるようで我々は、左からやってみたがハイマツに捕まり引き返し、右から攻めてみた。ハイマツ帯だが、少し溝になったところは歩きやすく、ダケカンバに捕まりながら右へ進み、尾根の芯に乗った。岩場になって2ピッチロープを出し



スラブ帯右側の岩場

た。この先のトリコニーよりも、ここの方がこのルートの核心だと思えた。

「一般には30mの凹角を登り、浅いルンゼに入り、さらに7mほどのチムニーを抜けてトリコニーの下のハイマツ帯に出ているようである。」

30mの凹角はガスのための確認できなかった。しかし、「トリコニーの下のハイマツ帯に出ている」とあるが、我々は先ほどの岩場を抜けてハイマツ帯に出た。ハイマツ帯は踏み跡をたどれば難なくかわせた。

「トリコニーは最初の岩峰を滝沢側から巻き、あとは岩稜通しに登る。さらにナイフ・エッジが出てくるが問題はなく、左に折れて広くなった尾根を適当に登れば吊り尾根に出る。」



トリコニーI峰



ナイフリッジ



トリコニーII峰

トリコニーはほとんど確保なしで登れた。その先に1カ所ギャップがあり、懸垂で下降した。「左に折れて広くなった尾根を適当に登れば吊り尾根に出る。」と簡単に書かれているが、トリコニー2峰から吊り尾根まで2時間を要した。

「頂上には、11時40分に着いた。下降は4時間半かかったが、登るとき以上に苦しいものであった。渦巻く霧の中で、最初の600mばかりは、ルートを見付けるのが困難なことが多く、わらじと靴はくしゃくしゃのみすぼらしい状態になってしまった。」



【引用した参考文献】

日本登山大系 槍ヶ岳・穂高岳

岳沢の項で紹介されているのは、1 明神西壁AB尾根、2 明神西壁BC尾根、3 滝沢大滝、4 奥穂高岳南陵、5 コブ尾根、6 畳岩尾根、7 畳岩の7ルートだ。

P147 4 奥穂高岳南陵 (3-4時間、1912年8月、ウォルター・ウェストン、上条嘉門次)

吊尾根の奥穂よりから岳沢に伸びる尾根で、中間部にある三つの岩峰トリコニーで有名な古典的ルートである。岩も堅く、楽しいルートで人気がある。取り付きは前記大滝手前の左手の小ルンゼ。雪渓の状態によっては取り付くのに苦勞する。ルンゼが終わると草付きの斜面となり、すぐにスラブに突き当たる。南陵で最も悪いところだが、ルートはいくつか選べる。一般には30mの凹角を登り、浅いルンゼに入り、さらに7mほどのチムニーを抜けてトリコニーの下のハイマツ帯に出ているようである。トリコニーは最初の岩峰を滝沢側から巻き、あとは岩稜通しに登る。さらにナイフ・エッジが出てくるが問題はなく、左に折れて広くなった尾根を適当に登れば吊り尾根に出る。奥歩まで一投足である。

奥穂高南稜 ウェストン

1912年8月24日 1913年8月29日

W.ウェストン 日本アルプス再訪 P231 より引用

嘉門次との出会いのシーンから

われわれが大好きだった山をふたたび私を歓迎しようと、一週間前から待ち続けたと彼は言う。そして、かれわれとの再会を心から喜んでいるのを見るのは、じつに嬉しい。われわれはこの再開を祝うために、上高地から奥穂山塊の最高峰を新ルートから初登攀する計画を立てた。このルートはかつて嘉門次が十七年ほど前にクマを追跡したときに一部をたどったことはあるが、その全ルートをたどったことはない。目的にピークは、奥穂高(3111m)と呼ばれており、花崗岩の絶壁からなる巨大なカールの頂点である。その一つの枝稜は徳本峠の方へ向かって梓川の幅広い屈曲部へ延び、もう一つの支稜とともに、上高地がひっそりと静かに位置している上に、防護壁のように上高地を囲んでいる。

バラ色に染まった朝焼けはすばらしいものであったが、どこか天気崩れを思わせた。しかし、われわれはついに登攀に出発する。嘉門次は、我々がかつて一緒に苦闘した嵐の日々のことを念頭に置いて、何一つ手入れもししていないカモシカの皮で作ったラフなコ

ートを身にまとっていた。そして、彼の奇妙か、易しい、猿のような顔を木綿の手ぬぐいで頬被りしていた。大雨の日の水が梓川にあふれ、渡渉点を見付けるのが難しかったが、河童橋の先で川を渡るのに成功する。半もしたクマザサとぎっしりと生えた下草がひどく水分を帯びており、やがて身体の中までびしょ濡れになる。こうして一時間以上も進むと、森林のただなかに入っていく。ここ出足を駐めて、野生のクロフサスグリを賞味する。このクロフサスグリは信州のこの山と八ヶ岳にだけ見られるようである。

やがて、入り組んだ木の根で歩きにくい、滑りやすい道を離れて、白沢の幅広い岩だらけの川を、一時間ほど苦しみながら登る。この沢は奥穂高の中央部を構成する凹こんだ岩壁の真ん中の基部にまっすぐ伸び上がっている。沢のモレーン上の河床の上部は、小山のように高まった、吹きさらしの長い雪渓に覆われている。これは、我々にとって喜ばしい救いであったが、それも最後は深さ9メートルほどのベルクシュルトに突き当たる。そこで、注意しながらピッケルとロープを使ってその中に降りていき、とうとう、先の岩場の安全地点に無事に達した。

この2400mの地点で二回目の朝食を取るために休んだが、これは実に正しい、適当な休憩であった。というのは、その後、苦闘が何時間も続いて、その間、食事がとれなかったからである。今や、我々がたどるルートは、とてつもなく急峻な岩のバットレスであり、それからの二時間は、非常に厳しい登攀であった。穂高のこのフェースは、日本アルプス全体の中で最も長い、連続の登攀を強いられる。困難さの点で、ヨーロッパ・アルプスの数多くのすばらしい登攀と同格である。嘉門次は目覚ましい軽快な動きで前進した。清蔵と同じように、その足指と硬いしわのよった手指を使って、登っていった。濡れてぬるぬるした岩壁は、彼の柔らかいわらじを履いて、その安定した足場を確保する必要があった。今、我々が登って行って突入しようとしている低い雨雲から、無情に雨が降り始めたからである。

間もなく、雨と渦巻く煙霧がすべてを視野から隠し、本の近くだけしか見えなくなる。岬々たる稜線の上に、猛り狂う風が一瞬突風となって、驚くほど荒涼として溪谷にそびえ立つ岩壁や尖鋒をちらっと見せるだけである。そのうち、風は西方から同時に襲ってくるように思われ、雨は上からも下からも降るように見えた。もう6時間近くも厳しい登攀を続けていた。着ている衣類はずっと前からびしょ濡れになったままで、手足はかじかんで、身体は骨まで冷えていた。私のクレッターシュー（岩登り用の靴）は、割れた花崗岩の尖った角でズタズタに切れてしまい、びしょ濡れた木綿の布の靴底は、尖った岩角がたいへん痛かった。霧が辺りの絶壁にまとわりついて、そのファンタスティックな形をゆがんで見せたり、ぼんやりとさせた。一つの障害を乗り越えても、また別の生涯がその先に、ぼんやりと姿を現すだけであった。

ついに、私は重大な課題に対面しなければならなかった。この辛い苦しみにどれだけ耐えられるか、また、びしょ濡れと飢えと寒さの中で、自分ばかりか他の者にもがんばって登攀を続けられることが、どもまで許されるのか、という課題であった。その時、突然、

一瞬の間だったが、煙霧が薄れ、雲のカーテンの中に切れ目が出来、ある地点が見えた。

「できました、できました！」と嘉門次が叫ぶ。彼の心配そうだった顔に、安堵と満足の入り交じった笑みがいっぱい表れ、それまでにたまっていた陰鬱な気分が消えた。そして、脇に寄って、日本アルプス全体の中で最も美しい花崗岩の山の頂上を形成している、ガレた岩場へ立つように私を促した。我々はそこに長く留まるつもりはなかった。ただ、互いに喜びの言葉を交わしただけであった。しかし、少しだけ時間を割いて、次の吹きさらしの場所に、一本の小さいミヤマキンバイのかわいらしい黄色の花が咲いているのを眺めた。他の花がないときでも、その花だけは日本アルプスのほとんどすべての高峰で、いつも私を出迎えてくれる。

頂上には、11時40分に着いた。下降は4時間半かかったが、登るとき以上に苦しいものであった。渦巻く霧の中で、最初の600mばかりは、ルートを見付けるのが困難なことが多く、わらじと靴はくしゃくしゃのみすぼらしい状態になってしまった。ピークの基部の近くには、滑りやすいクマザサの茂みが網の目のように広がっていて、どろ沼に入ったように、苦しみもがいた。早朝には、か細い流れだったものが、今は轟き流れる奔流と変わった。それら奔流のそばで、同行者の一人が、私を背負って渡渉すると言ってくれたので、その申し出を素直に受け入れた。しかし、奔流の途中で、二人の体重のために、思っても見なかった浮き砂の中にはまり込んだので、私は降りて、彼を抜き出す羽目になった。

。。。。。